

## ちいさな証

## 元旦の朝を迎えて

原 しのぶ

スイス日本語福音キリスト教会会員



花火で賑い始めた、この大晦日の夜から新年の声を聞いてさらに夜が更けるまで、夫の手を焼かせながら長い間わたしは例年になく泣いていました。一ヶ月以上前に人の言葉から心に受けた傷を、時間と心のゆとりができた大晦日に思い出しちゃってしまいました。

去年を振りかえって見ればというと、始めてから2年間弛まず、泉のように湧き上がる動機が与えられている、教会音楽の学びのための、春にあったオルガン実技試験と、夏の、私にとって難関だったオルガン構造学とその歴史の筆記試験、それから冬にはドイツ語の2つの試験、また、数の増したオルガンでの奏楽の仕事がわたしの日常にさらに加えられて、かなり濃厚な一年を過ごしてきました。年末には日本からの若い女友達の家族と我が家で密な時間を共に過ごし、送り出した後の、久しぶりの、なにも予定のない6日間を迎え始めたのがこの大晦日でした。

そういえば12月末のニュースレターには「ご降誕という、あなたのその偉大な謙遜から、この世において忍耐と主を待ち望むことを私たちに学ばせてください。」とわたしの「小さな祈り」を捧げつつ寄稿して間もないばかりだったのに、、、。ただ悲しくて、自分の内で気持ちの折り合いもつけられないまま、元旦の朝を迎えました。

その朝は夫と詩篇106篇を読みました。この篇はイスラエルの壮大な歴史絵巻の様です。夫がよく論理的に図解や表分析にして聖書を読むのに習って、私も神と人について表にして書き出し、栄光ある神の偉大さと人の至らなさ、そして十字架がなければわたしたちは救われない存在であることを味わい、分かち合いました。

「わたしの負い目をお許してください。主にのみ栄光を帰すことができるように。」という小冊子「みことばの光」の「今日の祈り」を目にしたとき、悲しみで硬くなってしまった、私の心の部分が溶かされて、自由にされました。この編集者のとりなしの祈りともいえる、この祈りをわたしが捧げた時、主が即座に何か縛られているものから解放してくださいました。

人から傷つけられたときも最終的には神さまはいつもこの悔い改めの祈りにわたしたちを導かれることを再び体験しました。いつも必ず！私たちの魂の自由のために主がこのように導

かれます。そう、そしてわたしがいつの日か死ぬ直前にもこの祈りを捧げたいと思われました。

その日、Facebookの「お友達」が新年の祈りを伝言板に書き込んでいました。

「いかに物ごとを善く始めても、忍耐しなければ、それは小さなことでもあります。」(カルヴァン)

そのとおりです、神さま

忍耐の一年、そして生涯を尽くして

わたしたちが、あなたに喜ばれる善きことを  
小さな一歩を重ねていくことができますように  
わたしたちを家族と共に 友人たちとともに  
導いてください。

この静けさから生まれた祈りはわたしの心の隅々まで沁みて広がり、根から切り落とされた葦ようになっていたわたしの魂を再び生き返らせました。カルヴァンの「忍耐」という言葉によって霊的な深い励ましを受け、もう一度立ち上がって小さな一歩をまず踏み出してみよう、という思いが与えられました。これは神の「不思議」でした。なによりもキリストがこのとりなしの祈りを通してわたしを励ましてくださっているとも感じました。

「キリストの十字架を見上げつつ、どんな痛みも自分の十字架と思って耐えて、従っていこう」と決心しても、よく倒れてしまうわたしですが、またいつでもこのように主が起こしてくださるので、神の大船に乗っている気持ちです。

そんなこんなで、すっかり出遅れてしまった、手作りおもちのお雑煮のためのもち米を大蒸籠で蒸したり、息子やひさしぶりに帰ってきた大学生の娘と共に家族揃って、結婚や男女の愛と性について聖書がなんと語っているかについて活発な議論をしたり、元気になって新年の第一日目を過ごしました。私たちの状況は変わらなくても私たちの思いが変えられる！という神の御業がこの2つのとりなしの祈りによって現されたことをお伝えしたかったです。

主にのみ栄光ありますように！！  
ドイツ ボーデン湖メアスブルグにて

